

「奇跡の教室 受け継ぐ者たちへ」

★★★★

2016（平成28）年8月21日

鑑賞<テアトル梅田>

監督：マリー・カスティーユ・マンシオン・シャール

アンヌ・ゲゲン（ベテラン歴史教師）／アリアンヌ・アスカリッド

マリック（男子高校生）／アハメッド・ドゥラメ

／ノエミ・メルラン

／ジュヌヴィエーヴ・ムニシュ

／ステファン・バック

2014年・フランス映画・105分

配給／シンカ

<「学校モノ」あれこれ。さて本作は？>

落ちこぼれの中・高校生が教師の熱血指導によって大変身！日本でも、そんな「あっと驚く現実」は、坪田信貴の原作『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話』を映画化した『映画 ビリギャル』（15年）に見ることができたが、そんな「あっと驚く現実」はフランスにも。

他方、『コッホ先生と僕らの革命』（11年）（『シネマルーム29』112頁参照）や『パリ20区、僕たちのクラス』（08年）（『シネマルーム24』109頁参照）等も同じような「学校モノ」だが、当時18歳だった少年アハメッド・ドゥラメがマリー・カスティーユ・マンシオン・シャール監督に贈った一通のメールから企画が始まった本作は、彼自身の高校1年生の体験もとづく物語らしい。

貧困層が暮らすパリ郊外の高校レオン・ブルムでは今、歴史教師アンヌ・ゲゲン（アリアンヌ・アスカリッド）が様々な人種の新入生たちに対して自己紹介していたが、「ガムを噛むな。ポケットにしまえ」「帽子をとれ」「携帯は禁止」というところから教え込まなければダメなようだから、今年の生徒たちも総じて出来が悪そうだ。アンヌは「教師歴20年。教えることが大好きで退屈な授業はしないつもり」と言っていたが、さてこんな（出来の悪い）生徒たちをどのように指導していくの・・・？

<金八先生以上のアンヌ先生の情熱に注目！>

導入部での生徒たちの出来の悪さを見ている限り、出来の悪い生徒が多い高校の教師なんてやるものではない。私は毎年1回だけ90分間の大阪大学「ロイヤリング」の授業で「都市法」の講義をしているが、そこでも年々学生の質の悪さを実感しているだけに、本気でそう思ってしまう。こんな生徒ばかりと毎日向き合っていたら、それこそ時間つぶしのつもりで授業をやらなければ・・・。

しかしアンヌはそうではなく、あくまでトコトン情熱的に生徒たちに対峙していくから、前半はそんな「金八先生」以上のアンヌの情熱(?)に注目！そして、ある日アンヌが生徒たちに対して「全国歴史コンクール」への参加を提案したところから、本作の本題がスタートしていくことに。

<テーマは「アウシュビッツ」。その取材は？>

アンヌが生徒たちに示した歴史コンクールのテーマは「アウシュヴィッツ」。ナチス・ドイツの支配下に置かれたフランスでは1940年6月にヴィシー政権が登場したが、ヴィシー政権もナチス・ドイツによるユダヤ人への迫害に協力したことは、『黄色い星の子供たち』（10年）（『シネマルーム27』118頁参照）、『サラの鍵』（10年）（『シネマルーム28』52頁参照）等を観れば明らかだ。しかし、今ドキのフランスの高校生たちは、そんな歴史やさまざまな歴史的事実をほとんど知らないらしい。

当初は参加を嫌がっていた生徒たちも、アウシュヴィッツ記念館を見学すると、その姿勢は大きく変化。アウシュヴィッツ記念館の見学は、広島原爆記念館の見学と同じような効果があるようだ。さらに、ある日アンヌが強制収容所の生存者レオン・ズィゲルを招待し、彼から「生の証言」を聞くと、涙を流しながらその言葉を聞いていた生徒たちの姿勢には明らかな変化が・・・。しかして、歴史コンクールへの参加については全員参加を目指しながらもあくまで自発性を尊び、自主的に活動してきた生徒たちの変化ぶりは・・・？

<生徒たちの変わりように、涙がポロリ！>

本作はドキュメンタリー映画ではないから、ストーリーの軸は決まっている。そのうえ、結果も最初からわかっているから、ストーリーの盛り上がりは期待してもダメ。私は最初からそう思っていたが、それでもずっとスクリーンを見ていると、生徒たちの変わりようにビックリ。こうなれば、教える側、指導する側も楽しくなり、やりがいが出てくるのは当然だ。しかして、本番に向けて生徒たちの盛り上がりはピークに・・・。これはあたかも『スウィングガールズ』（04年）で見たブラズバンドの女子高生の変わりようと同じようなものだ（『シネマルーム4』320頁参照）。しかして、大臣たちも出席する、士官学校での受賞式での結果発表は？

物語の起承転結が最初からわかっている、いいシーンでは、またいいセリフでは、思わず涙がポロリ。「今ドキの若いモンは・・・」と文句ばかり言うのはダメだと、あらためて痛感！「あなたたちを信じているのは私だけ？皆ならこのテーマを語れるはず」。そんなアンヌ先生のセリフを、私もどこかで心の底から言いたいものだが・・・。